

第10回全国大学生マーケティング・コンテスト (MCJ) 決勝大会

12月11日(土曜)、企業等のマーケティングプランを英語で発表し競い合う「第10回全国大学生マーケティング・コンテスト (MCJ) (Marketing Competition Japan)」の決勝大会が、神戸市中央区三宮の「アンカー神戸」で開催されました。コロナ禍を受けて、学外実施、無観客、インターネットでのライブ配信、初めて海外市場を発表テーマとするなど、初挑戦の多い決勝大会になりました。

今大会は、1804年創業の味噌・醤油メーカーのサンジルシ醸造株式会社(三重県桑名市)が、1978年にアメリカ・バージニア州リッチモンドに設立した現地法人 San-J International Inc.をメインスポンサー(テーマ提供企業)に迎え、「アメリカ市場における発酵食文化3.0の創造～San-Jの醤油製品のマーケティングプラン～」をテーマに開催しました。

日本食がある程度市民権を得たアメリカにおいて、たまり醤油をはじめとした発酵食品が、アメリカらしい独自の進化を遂げるためには何が必要かを探る難しいテーマに対し、4大学12チームの応募がありました。決勝大会には書類と動画による予選審査を通過した本学・専修大学・中央大学・法政大学の4大学から7チームが出場し、日本の食文化やアメリカで関心の高い健康維持を意識した斬新なプランのプレゼンテーションを行いました。

優勝は法政大学の「S601」。2位に法政大学の「Shōyu こと」、3位に中央大学の「NANCY」が入賞しました。

大会の様子はMCJ公式YouTubeチャンネルで配信中です。ぜひご覧ください。

→ <https://youtu.be/OQiyKW5T3iE>



外大参加チームインタビュー

Team Brown Magicians
(Kobe City University of Foreign Studies)



- MCJのプレゼンテーションのために、どのような準備をしましたか。準備の流れを教えてください。(プレゼンのテーマのリサーチ、パワーポイントスライドショー作成、セリフの暗記や英語のチェック、発音のチェックなど)
→ まずは聞き手が試してみたいと思うようなプランを考えるのに最も時間を費やしました。そのために、マーケティング対象の情報収集、顧客層、望める経済効果などリサーチ中心に取り組みました。その情報をもとに日本語で原稿を書き、それを英訳・暗記をして本番に挑みました。
- 今回のMCJのテーマはお醤油をアメリカで広めるというテーマでした。Brown Magiciansの皆さんにとって、日本ではなくて、海外でのマーケティングプランを考える上で苦労したことはありますか。
→ 海外の小学校給食とのコラボレーションにより、現地の人びとの健康を向上させるプランでしたが、現地の小学校の情報を集めることに苦労しました。特に、小学校で出されている給食や学年の人数など具体的な数値を収集するのに時間を要しました。
- イベントに参加してみて、1番楽しかったこととその理由を教えてください。
→ やはり本番のプレゼンでした。セリフは覚えているし、内容は変えられないし、後は自信をもってプレゼンをするだけという気持ちでした。身振り手振りも TED*)のspeakerになりきったつもりで最後までプレゼンをしました。
*) TEDとは「広める価値のあるアイデア」を基調にしたコミュニティで、世界各地で講演会などを行っている。技術(Technology)、娯楽(Entertainment)、デザイン(Design)の頭文字から由来する。
- 来年のMCJに挑む外大生の皆さんへのアドバイスをお願いします。
→ アイデアが何より大切。英語力・言い回しなどは二の次で、型に縛られない独創的なアイデアを考えれば予選は通過すると思います。本番では自分の伝えたいことをシンプルに聴衆に届けてほしいです。

MCJ運営委員学生インタビュー



- なぜマーケティングコンテストの運営に参加しようと思いましたか。
(清水) : イベントやコンテストのような一見華やかに思える舞台の裏では、どのような地道な準備がなされているのか、という事を学べるきっかけになると思い、運営に参加しました。
(牧) : さまざまな大学や企業の方々関わる格式高い大会の雰囲気や環境づくりに社会人になる前に携わってみたいからです。
- コンテストのスポンサー企業や審査員とのやりとり、運営メンバーのマネジメントなど、MCJで携わったことの中で、一番やりがいを感じたことを教えてください。
(酒井) : 今年は外部施設での開催や生配信など、初めての試みが多かったので、学生の提案が会場づくりに直結してくる点が印象深かったです。会場下見や配信業者さんとの打ち合わせも綿密に行いました。
(大平) : 前年度はコロナのため大会が実施されず引き継ぎがなかったため、全員が手探りの状態で準備しました。4カ月に渡りオンライン会議で顔を合わせたことがなく、事務的なやりとりしか出来ない中でのメンバーのモチベーション維持は難しい課題でしたが、大会後にメンバーの笑顔を見れたときは非常に嬉しかったです。
- 今回のコンテストは3カ国にいる関係者をつなぎ、初めてインターネットで中継されました。どこが一番チャレンジになりましたか。
(酒井) : 週1回の会議では決断が間に合わないことが多くあり、メール上で頻繁にやり取りをしていました。文章上では行き違いや見落としが起きやすいので、「報・連・相」の徹底をみんなが意識していました。
(大平) : 何か一つ決めるにあたり1週間以上レスポンスが空いてしまうことが普通だったため、簡潔かつ正確に報告・連絡・相談することが重要でした。今大会は例年に比べ準備期間が短かったため、メンバーも自ずと意識し行動に移していました。
- コンテストの運営に関わって、今後役立つどんなスキルを身に付けましたか。そのスキルをどのように磨きましたか。
(門田・阪口) : 司会と当日のスケジュール管理を担当し、先読み能力と対応力を身に付けました。一つ一つの動きを深掘りすることで、必要なもの・流れを明確化しました。当日は必要に応じてアナウンスを変更するなど、臨機応変に対応できました。

■ 本学教員の出版物紹介

種別	著者	書名	出版年月	出版社	その他
訳	エレナ・バイビコワ ロシア学科准教授	Чай в зимнем лесу: сказка	2022年	Манн, Иванов и Фербер	
共著	ファン・ロメロ・ディアス イスパニア学科准教授	詳説スペイン語文法	2021年9月	白水社	福高教隆名誉教授と共著